

日語詞法序論：詞語與構詞

湯 廷 池* 劉 懿 珍**

* 東吳大學日本語文學系客座教授

** 東吳大學日本語文學系博士班

中文摘要

本論文以日語形容詞的研究為最終考察目標、針對現代日語的詞語與詞法介紹基本的概念與術語。尤其對於日語派生詞與複合詞的構詞現象與課題進行考察與論證。其次把日語形容詞分為由一個語素所形成的單純形容詞與由兩個或兩個以上的語素所形成的合形成形容詞，再把合形成形容詞細分為由詞幹與詞綴所形成的派生形容詞以及由詞幹與詞幹所形成的複合形容詞。以下把日語派生形容詞與複合形容詞的主要內容記述如下。

(1) 派生形容詞：

(A) 帶上前綴的派生形容詞

(甲) 依據前綴的語種來分類：①和語前綴（あくどい）②漢語前綴（しちくどい）③外來語前綴（スーパーむずかしい）

(乙) 依據意義類型來分類：①美化型前綴（おいそがしい）②緩和型前綴（うそくらい）③強調型前綴（てあつい）

(丙) 依據句法結構來分類：只有修飾型一種（ものがなしい）

(B) 帶上後綴的派生形容詞

(甲) 依據後綴的語種來分類：①和語詞幹＋和語後綴（[おもっ
たい] [しょっぱい]) ②漢語詞幹＋和語後綴（[阿呆くさ
い] [面倒くさい])

(乙) 依據意義類型來分類：①緩和型（[ぐちっぱい]) ②強調型
（[めんどうくさい])

(丙) 依據句法結構來分類：只有修飾型一種（[おもったい])

(2) 複合形容詞：

(甲) 依據詞幹的語種來分類：①和語詞幹＋和語詞幹（[うす・
あまい]) ②漢語詞幹＋和語詞幹（[我慢・づよい]) ③漢
語詞幹＋漢語詞幹（[四・角い]) ④外來語詞幹＋和語詞幹
（[ゴム・くさい])

(乙) 依據句法結構來分類：①主述型（[腹(が) 黒い]) ②並列
型（[暑(くて) 苦しい]) ③修飾型（[薄(く) 暗い])

關鍵詞：詞語、語素、詞幹、詞綴、日語詞法、單純形容詞、派生形容詞、複合形容詞

日本語語形論序説：語と語形成

湯 廷 池* 劉 懿 珍**

* 東呉大学日本語学科 客員教授

** 東呉大学日本語学科 博士課程

要 旨

本論は、現代日本語形容詞の研究を最終射程に入れ、日本語の語と語構成について、その基本的な概念と用語を紹介し、特に派生語と複合語の語形成について考察・論証する。次に、日本語の形容詞を1つの形態素からなる単純形容詞と2つ、あるいは2つ以上の形態素からなる合形成容詞に分け、合形成容詞をさらに語幹と接辞からなる派生形容詞と語幹と語幹からなる複合形容詞に分ける。また、派生形容詞と複合形容詞の内容は大体次のように記述することができる。

(1) 派生形容詞：

(A) 接頭辞をとる派生形容詞

- (イ) 接頭辞の語種に基づく分類：①和語接頭辞 ([あくどい]) ②漢語接頭辞 ([しちくどい]) ③外来語接頭辞 ([スーパーむずかしい])
- (ロ) 意味類型に基づく分類：①美化型接頭辞 ([おいそがしい]) ②緩和型接頭辞 ([うそくらい) ③強調型接頭辞 ([てあつい])
- (ハ) 統語構造に基づく分類：修飾型一種しかない ([ものがなしい])

(B) 接尾辞をとる派生形容詞

- (イ) 接尾辞の語種に基づく分類：①和語語幹＋和語接尾辞 ([おもったい][しょっぱい]) ②漢語語幹＋和語接尾辞 ([阿呆くさい][面倒くさ

い])

(ロ) 意味類型に基づく分類: ①緩和型接尾辞 ([ぐちっぽい]) ②強調型接尾辞 ([めんどうくさい])

(ハ) 統語構造に基づく分類: 修飾型 ([おもったい])

(2) 複合形容詞

(イ) 語幹の語種に基づく分類: ①和語語幹+和語語幹 ([うす・あまい]) ②漢語語幹+和語語幹 ([我慢・づよい]) ③漢語語幹+漢語語幹 ([四・角い]) ④外来語語幹+和語語幹 ([ゴム・くさい])

(ロ) 統語構造に基づく分類: ①主述型 ([腹(が) 黒い]) ②並列型 ([暑(くて) 苦しい]) ③修飾型 ([薄(く) 暗い])

キーワード: 語、形態素、語幹、接辞、語形成、単純形容詞、派生形容詞、
複合形容詞

An Introduction to Japanese Word-Syntax: Japanese Words and their Formations

Ting-chi Tang* Yi-chen Liu**

*Visiting Professor, Department of Japanese Language and Culture
Soochow University

**Ph.D. Candidate, Department of Japanese Language and Culture
Soochow University

Abstract

The ultimate purpose of this paper is to investigate and analyze the structure and formation of adjectives, including derived and compound adjectives, in modern Japanese. In the meanwhile, the basic concept and terminology to be related to the words and word-syntax will be defined and be recorded.

Japanese adjectives can be divided into two subclass: namely, simple adjectives, which consist of one stem and no affix; and complex adjectives, which can be further divided into derived adjectives, which consist of one stem and one or more affixes; and compound adjectives, which in composed of two or more stems. In this phase, about derived adjectives and compound adjectives can be classed as listed below:

(1) derived adjectives:

(A) the derived adjectives which take prefixes

(a) sub-classifications according to the origins of the prefixes: ①Japanese origins ([あくどい]) ②Chinese origins ([しちくどい]) ③foreign origins

([スーパーむずかしい])

(b) sub-classifications according to the semantic types: ①honorific ([おいそがしい]) ②down-toning ([うそくらい]) ③emphatic ([てあつい])

(c) sub-classifications according to the syntactic structures: modifier-modified ([ものがなしい])

(B) the derived adjectives which take suffixes

(a) sub-classifications according to the origins of the suffixes: ①Japanese stem + Japanese suffix ([おもったい][しよっばい]) ②Chinese stem + Japanese suffix ([阿呆くさい][面倒くさい])

(b) sub-classifications according to the semantic types: ①down-toning ([ぐちっばい]) ②emphatic ([めんどうくさい])

(c) sub-classifications according to the syntactic structures: modifier-modified ([おもったい])

(2) compound adjectives:

(a) sub-classifications according to the origins of the stems: ①Japanese stem + Japanese stem ([うす・あまい]) ②Chinese stem + Japanese stem ([我慢・づよい]) ③Chinese stem + Chinese stem ([四・角い]) ④ foreign stem + Japanese stem ([ゴム・くさい])

(b) sub-classifications according to the syntactic structures: ①subject-predicate ([腹(が) 黒い]) ②coordinator ([暑(くて) 苦しい]) ③modifier-modified ([薄(く) 暗い])

Key words : word、morpheme、stem、affix、word-syntax、simple adjectives、derivative adjectives、compound adjectives

日本語語形論序説：語と語形成

湯 廷 池* 劉 懿 珍**

* 東呉大学日本語学科 客員教授

** 東呉大学日本語学科 博士課程

1. はじめに

この論文の最終目的は、現代日本語の形容詞とその派生語や複合語の語形成を考察・論証することにある。そこで、この序説では、語と語形成に関する基本的な概念や用語について述べることにする。すなわち、語とは何であるか、語はどのように分類されるのか、語はどういう要素がどのように並べられて造られているのか、語の構造はどのような特徴や規則性をもっているのか、などの問題を考察するにあたって、言語について語るメタ言語 (metalanguage) として一応わきまえておかなければならない術語を、逐次紹介し討議していきたい。

2. 語と形態素

まず、ここで使われる「語」という言葉は舶来品である。すなわち、英語の「word」に相当する「語」という言葉は、日本語固有の語彙ではなく¹、文法や言

1 日本語の「言葉」が英語の「word」に相当すると思われる人がいるかも知れないが、日本語の「言葉」が表わす外延は「語」のそれに比べてはるかに広い。ちなみに、『広辞苑』に収められた「語」の項目には「①ものを言うこと。話すこと。かたること。「-気」「私-」②ことば。ことばづかい。単語。「-をかわす」「-句」「国-」「-源」」の2通りの解釈があり、その中の

語学を研究するにあたって、文・主語・述語・名詞・動詞などの用語とともに欧米から伝わってきたメタ言語である。次に、「語」は形態論 (morphology) で扱われる最大の単位であり、統語論 (syntax) で扱われる最小の単位である、というようにその存在は確認されているのであるが、「語」そのものを厳密に定義づけるのは決して容易なことではない。例えば、竝木 (1985 : 9) は、語 (または単語) を次のように定義している²。

(1) 語とは、言語において

- a. 独立して現われることができ (independent)、
 - b. 分割不可能で (inseparable または indivisible)、
 - c. 意味を持った (meaningful)、
 - d. 最小の (smallest または minimal)、
- 単位である。

まず、a.の「独立して現われることができる」というのは、「特定の意味を持ち」(c.)、「音声的にこれ以上さらに分割することができない最小の単位」(b.、d.)であっても、「-い」(形容詞未然終止形・連体形)、「-かった」(形容詞已然終止形・連体形)、「-く」(形容詞連用形)などの語形変化³や「-さ」(形容詞から名詞を

②の「単語」がここで言う「語」に相当するが、一方「言葉 (詞、辞)」の項目には「①意味を表わすために口で言ったり字に書いたりするもの。言語。[例語略] ②物の言いかた。口ぶり。語気。[例語略] ③言語による表現。[例語略] ④言葉のあや。事実以上に誇張した表現。[例語略] ⑤文芸表現としての言語。詩歌、特に和歌など。[例語略] ⑥謡い物・語り物で、ふしのつかない部分。また、歌集などで、歌以外の散文の部分。⑦物語などで、地の文に対して会話の部分」など都合7通りの解釈の中に、「語」に相当する解釈は見当たらない。

2 竝木 (1985) は英語に関する語形論であり、次の定義も Jespersen (1924 : 92-95)、Bloomfield (1926 : 27)、Bloomfield (1933 : 179-181)、Merchand (1969 : 1)、Adams (1973 : 7-8)、増田 (1978 : 5) などみな英語の語形成に関する先行文献に基づいている。

3 語形変化は、また屈折変化 (inflection) とも呼ばれ、さらに動詞の人称・数・時制・法・態による活用変化 (conjugation) と名詞、代名詞や形容詞の性・数・格などによる曲用変化 (declension) に分けることができるが、日本語の形容詞は述定用法 (predicative use) として時制や法などの語形変化を呈するので、曲用変化よりも活用変化と呼ぶべきであろう。

造り出す接尾辞)、「-まる」(形容詞から自動詞を造り出す接尾辞)、「-める」(形容詞から他動詞を造り出す接尾辞) など語幹に依存しなければ独立に現われることができない**拘束形態素** (bound morpheme) は、語ではないということである。名詞を例に借りて言えば、語幹「子供」も、複数接尾辞「-達」も、ともに特定の意味を持ち、音声的にこれ以上さらに分割することができないという意味で**形態素** (morpheme) であるが、独立して現われることができる**自由形態素** (free morpheme) の「子供」が語であるのに対して、独立して現われることができない拘束形態素の「-達」は形態素ではあっても、語ではなく、「子供達」や「友人達」のように自由形態素である**語幹** (stem)⁴の「子供」や「友人」と結びついて始めて語の資格を得ることになる。しかし、また、たとえ語幹であっても、形容詞語幹「高」(たか)や「低」(ひく)のように拘束形態素であれば、それだけでは語とならず、未然形接尾辞「-い」、已然形接尾辞「-かった」、名詞化接尾辞「-さ」、自動詞化接尾辞「-まる」や他動詞化接尾辞「-める」⁵などを取ることによって、「高い」「高かった」「高さ」「高まる」「高める」や「低い」「低かった」「低さ」「低まる」「低める」のように語を形成するのである。語と形態素の関係は大体次のように整理することができる。

(2) a. 自由形態素 (語幹) = 語 = 単純語

b. 自由形態素 (語幹) + 自由形態素 (語幹) = 語 = 合成語 = 複合語

-
- 4 語の構成要素の中から任意の**接辞** (affix) を取り除いて後に残る部分を**語幹** (stem) と呼び、すべての接辞を取り除いた後に残った語構造の中心的部分を**語根** (root) と呼ぶ。例えば、派生名詞「女らしさ」の中から名詞接辞「-さ」を取り除いて後に残る部分「女らしい」は語幹であり、さらに「女らしい」から形容詞化接辞「-らしい」を取り除いた後に残った部分「女」は語幹でもあり、かつ語根でもある。すなわち、語根は必ず語幹であるが、語幹は必ずしも語根であるとは限らない。また、語根は**語基** (base) や**基体** (radical) などと呼ぶこともあるが、本論文では煩雑を避け、統括して語幹と呼ぶことにする。
- 5 自動詞化接尾辞「-まる /-mar」と他動詞化接尾辞「-める /-me」は、それぞれ、動詞化接尾辞「-m」に自動詞化接尾辞「-ar」と他動詞化接尾辞「-e」が加わったものと分析することができる。

c. 自由形態素 (語幹)+拘束形態素 (接尾辞)=語=合成語=派生語

(或いは活用形)

d. 拘束形態素 (接頭辞)+自由形態素 (語幹) =語=合成語=派生語

e. 拘束形態素 (語幹)+拘束形態素 (接尾辞) =語=合成語=派生語

(或いは活用形)

f. 拘束形態素 (接頭辞)+拘束形態素 (語幹) =語=合成語=派生語

単純語と合成語 (派生語と複合語を含む) の区別や接頭辞と接尾辞の区別については、次の節で詳しく述べる。

3. 単純語と合成語

3.1 単純語

まず、**単純語** (simple word) とは、自由形態素 1 つからなり、独立して現われることのできる語を指す。**名詞**「子供 (こども)、大人 (おとな)、犬 (いぬ)、猿 (さる)、本 (ほん)、筆 (ふで)」、**形容名詞** (「静か、朗らか、賑やか、綺麗、勇敢、慎重、チャーミング⁶、シック」、**数詞**「一 (いち)、二 (に)、三 (さん)⁷」) などの**内容語** (content word) は勿論のこと、**代名詞**「わた (く)し、ぼく、きみ、あなた、これ、それ、あれ、どれ」、**決定詞**「この、その、あの、どの」、**助数詞**「冊 (さ

6 外来語「チャーミング」の原語「charming」は元来「charm」(動詞) に「-ing」(形容詞化接尾辞) が付加されてできた派生語であるが、日本語では形態素 1 つからなる単純語とみなされる。同様に、漢語形容名詞「綺麗、勇敢、慎重」なども中国語では 2 つの語幹からなる複合語であるが、日本語では普通単純語とみなされている。

7 和語数詞「一(ひと)、二(ふた)、三(み)」は、「一(ひ)、二(ふ)、三(み)」のように数え上げる場合を除いては、単独で用いられることがなく、「一つ、二つ、三つ」や「一人(ひとり)、二人(ふたり)、三人(さんにん)」のようにかならず助数詞を伴って現われるので、その意味で漢語数詞に比べて拘束形態素的だと言えよう。

つ)、本 (ほん)⁸、台 (だい)」、格助詞「は (係り助詞)、が (主格助詞)、を (目的格助詞)、に (与格助詞)」、副助詞「から (起点格)、まで (着点格)、で (場所・道具格)」、接続助詞「(未然形る) と、(已然形た) ら、(仮定形れ) ば、なら」、終助詞「よ、ね、か(い)、さ、わ」などの機能語 (function word) も独立して現われることができる自由形態素として解釈され、単純語とみなされる。特に決定詞、格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞などの機能語は、みな**不変化詞** (particle) に属するので接頭辞や接尾辞を付加することができない上に、その統語機能上特定の句範疇 (phrasal category) を伴って文中の特定の位置に (例えば、決定詞は**名詞句** (noun phrase) の前に、格助詞と副助詞は名詞句の後に、接続助詞は**節** (clause) の後に、そして終助詞は**文** (sentence) の後に) 現われなければならないので、実際には独立して現われることができないが、一応語として扱われるのである。また、形容詞と動詞は語幹だけ独立して現われることができず、かならず未然形接辞「-る(-ru)⁹/-い(-i)」、已然形接辞「-た(-Ta¹⁰)/-かった(-katta)」、連用形接辞「-て(-Te¹⁰)/-く(-ku)」、や名詞化接辞「-(i)/-さ(-sa)¹¹/-み(-mi)¹²」などを伴わなければならないので、

8 助数詞「本」は「一本(いっぽん)」の「ぼん」、「二本(にほん)」の「ほん」、「三本(さんぼん)」の「ぼん」のように音声的に異なる3つの**異形態** (allomorph) からなっている。

9 動詞語幹が母音「い(i)、え(e)」で終わる**母音動詞** (vocalic verb、いわゆる「上一段」と「下一段」) の場合には「-る(-ru)」を取り、動詞語幹が子音「m、n、b、t、r、w、s、k、g」で終る**子音動詞** (consonantal verb、いわゆる「五段活用」あるいは「四段活用」) の場合には「-u」を取る。すなわち、日本語動詞の未然形接尾辞は音声の異なる「-ru」と「-u」の異形態を持つことになる。また、これらの異形態は、**音節文字** (syllabic writing) に属する片仮名や平仮名での確に標記することは難しく (例えば、「-u」を「う」で標記することはできない)、**表音文字** (phonetic writing) に属するローマ字で標記することが望ましい。

10 「-Ta」と「-Te」の中に含まれる大文字の「T」は**形態音素** (morphophoneme) を表わし、母音動詞の後では「た(-ta)/て(-te)」と発音され、子音動詞「m、n、b」、「s、k、g」、「t、r、w」の後ではそれぞれ「んだ(-nda)/んで(-nde)」(いわゆる「撥音便」)、「った(-tta)/って(-tte)」(いわゆる「促音便」)、「いた(-ita)、いた(-ita)、いだ(-ida)/いて(-ite)、いて(-ite)、いで(-ide)」(いわゆる「イ音便」) と発音される。

11 例えば、「高さ、長さ、重さ、寂しさ、悲しさ、苦しさ」など。

12 例えば、「重み、悲しみ、苦しみ」など。ほとんどの形容詞が名詞化接尾辞「-さ」を取って派

形容詞と動詞の語幹は厳密な意味では拘束形態素に属するが、辞書の項目には未然形の接辞を伴って登記され、終止形として現れた場合でも単純語かのように扱われることが多い。

3.2 合成語

次に、**合成語** (complex word) とは、2 つ以上の形態素からなる語を指し、合成語は、さらに、語の構成素がすべて自由形態素か語幹からなる**複合語** (compound word) と語の構成素の中に拘束形態素 (すなわち、接辞) を含む**派生語** (derived word) に下位分類できる。

(3) A. 単純語

- B. 合成語
- a. 複合語
 - b. 派生語

複合語が語幹と語幹 (例えば、「薄¹³暗い、青_Aくさ_{N/A}¹⁴い、飲み_Vやす_Aい、読み_Vにく_Aい」¹⁵など) から形成されるのに対して、派生語は語幹と接辞から形成される。接辞は語幹の前に現われる**接頭辞** (prefix) と語幹の後に現われる**接尾辞** (suffix) の2種類に分けることができる。語幹が原則的に独立して現われることができる自由形態素として解釈されるのに対し、接辞は原則的に独立して現われることができない拘束形態素に属する。例えば、「もの悲し_Aい」「うら寂し_Aい」「か細_Aい」と「た弱_Aい」などの派生語は「悲しい」「寂しい」「細い」「弱い」などの形容詞語幹に副詞的な意味を表わす接頭辞「もの-」「うら-」「か-」「た-」

生名詞となるのに対して、形容詞のごく一部分だけが名詞化接尾辞「-み」を取って派生名詞になる。

13 下付けの「A、N、V、・・・」は、それぞれ語幹が形容詞、名詞、動詞に属することを表わす。

14 「青くさい」は「青_Aくさ(=草)_Nい」と「青_Aくさ(=臭)_Aい」の二義に解される。

15 「薄、暗、青、くさ(=臭)、やす、にく」などの形容詞は厳密な意味で言えば、独立して現われることのできない拘束形態素に属するが、複合語や派生語の中で語幹として機能し、一般に語とみなさえる。

などが付加されてでき上がった派生形容詞である。一方、「腫れっぽい」「惚れっぽい」「男っぽい」「子供っぽい」などは「腫れる」「惚れる」「男」「子供」などの動詞語幹や名詞語幹に形容詞化接尾辞「-っぽい」が付加されてでき上がった派生形容詞である。以上の討論から、単純語と合成語を区別するためには、形態素の**自立性** (freeness) と **付属性** (boundness) の境界を確認しなければならず、複合語と派生語を区別するためには、語幹と接辞の境界を確認しなければならない。これらの問題を確認するために、接辞の内容についてさらに詳しく述べることにする。

3.3 接頭辞と接尾辞

語形成 (word formation) は、**派生形態論** (derivational morphology) と呼ばれ¹⁶、**語形変化** (inflection) を扱う**屈折形態論** (inflectional morphology) とともに、言語学の下位部門**形態論** (morphology)¹⁷ を構成する。広義の言語研究を**文法論** (grammar) の名称で呼ぶとすれば、その研究分野の内訳は大体次のようになる、

- (4)
- | | | |
|---------------|---|---------------------|
| 文法論 (grammar) | { | a. 音声論 (phonetics) |
| | | b. 音韻論 (phonology) |
| | | c. 形態論 (morphology) |
| | | { |
| | | i 屈折形態論 (語形変化) |
| | | ii 派生形態論 (語形成) |
| | | d. 統語論 (syntax) |
| | | e. 意味論 (semantics) |
| | | f. 語用論 (pragmatics) |

日本語の屈折形態論は、主に動詞や形容詞の語形変化 (例えば、終止形 (未然形

16 派生形態論はまた**語彙的形態論** (lexical morphology) と呼ばれる。竝木 (1985 : 3) 参照。

17 形態論、特に派生語と複合語の語形成は、統語的な構造と機能をもっているもので、**語統語論** (word-syntax、あるいは W-syntax) と呼ばれ、狭義の文構成と機能を扱う**文統語論** (sentence-syntax、あるいは S-syntax) と対照されることがある。Selkirk (1982 : 2) 参照。

と已然形を含む)、連用形¹⁸、連体形 (実質的には、終止形と同形)) を扱い¹⁹、これらの語形変化に使われる接辞を派生変化の接辞と区別して、**屈折接辞** (inflectional affix) と呼ぶことがある。日本語の屈折接辞は**接尾辞** (suffix) に限られ、**接頭辞** (prefix) が使われることはない²⁰。また、屈折接辞の特徴は語幹の品詞を変えることがない上に、ひとたび語幹に屈折接辞が付加されると、さらにまた別な接辞を付加することはできない²¹。

(5) 動詞

- a. (人を) 見-る (-r)u : 未然終止形)
- b. (人を) 見-た (-Ta : 已然終止形)
- c. (人を) 見-て²² (-Te : 連用形)
- d. (人を) 見²³ (-i) : 中止形)

18 連用形は「て形(-Te)」とも呼ばれるが、**中止形**「-(i)」を指すこともある。中止形とは、語幹が子音で終わる子音動詞の場合には接尾辞「-i」を取り (例えば、「読み、死に、遊び、立ち、降り、買い、指し、書き、泳ぎ」など)、語幹が母音で終わる母音動詞の場合には接辞に**ゼロ形態素** (zero morpheme) を取る。すなわち、語幹のままで使われる (例えば、「食べ、起き、見」など)。脚注 23 も参照されたい。

19 この他に、名詞や代名詞の複数形 (例えば、「子供達/ら」「私達/共/ら」「これら」) なども語形の変化の中に含まれるので、屈折形態論の枠内で扱われることになるが、人を表わす名詞や代名詞を除いて、複数接辞を取ることは少ない。

20 この点に関しては英語と中国語でも同じことが言える。

21 但し、英語の複数名詞の場合、複数接辞「-s」の後に属格接辞「-'s」、あるいは「-'」、を取ることができる (例えば、「children's」「boys'」)。しかし、この場合、**体言** (nominal) である名詞が**連体言** (adjectival) に属する属格名詞に転換しているので、厳格には品詞を変えない屈折変化と呼べないかも知れない。この点、日本語の属格助詞「の」や中国語の属格助詞「的」も屈折変化に属さないことに注意されたい。

22 「連用形 1」や「テ形」とも呼ぶ。已然形 (「タ形」とも呼ぶ) とともに**完了** (telic) のアスペクトを意味し、「品物を見てから (=見たあとで) 決める」などのように使われる。

23 「連用形 2」と呼ぶ学者もいる。「中止形」は筆者自撰の名称であり、述定用法では「品物を見、他の品物と比べる」などのように、ほとんどその後に読点を伴って現われる。《広辞苑》2278 頁「見 (み)」の項には、「見ること」と注釈され、《万葉集》20「山見れば見のともしく川見れば見のさやけく」や「花見」の例句が示されているが、この「見」は**名詞化形** (nominalized)

e. 見-る²⁴ (人) (-r)u : 未然連体形)

f. 見-た²⁶ (人) (-Ta : 已然連体形)

(6) 形容詞

a. (ことが) 辛-い (-i : 未然終止形)

b. (ことが) 辛-かった (-katta : 已然終止形)

c. (ことが) 辛-くて²⁵ (-kute : 連用形)

d. (ことが) 辛-く²⁵ (-ku : 中止形)

e. 辛-い (こと)²⁶ (-i : 未然連体形)

f. 辛-かった (こと)²⁶ (-katta : 已然連体形)

form) で体言 (nominal) として使われている。

24 日本語動詞の終止形と連体形は音声的に同形である。終止形 (finite form) とは、述定用法 (predicative use) で述語 (predicate) として使われる形式を指し、連体形 (adjectival form) とは、装定用法 (restrictive use) で修飾語 (modifier) として使われる形式を指す。また、体言 (nominal、あるいは substantive) は名詞・代名詞・指示詞・数詞など名詞的 (nominal、あるいは実質的 (substantive)) な素性を持つ品詞を指し、用言 (verbal、あるいは predicative) とは体言以外の品詞を指す。すなわち、連体用法とはある品詞が体言の前に現われた場合の統語機能を指し、連用形 (verbal、あるいは adverbial) とは、その品詞が体言以外の品詞 (主に用言であるが、それ以外の品詞 (例えば、助詞・接続詞などの品詞を含めてもよい)) の前に現われた場合の統語機能を指す。この意味で、体言は[+N]の素性で、そして、用言は[-N]の素性で表わしてもよからう。

25 形容詞「辛くて」と「辛く」の意味上の相違は、動詞の「見て」と「見」の相違のように、アスペクトの完了性・非完了性にあるのではなく、「辛くて悲しい」と「辛く悲しい」のように、前者が接続助詞「て」を伴う並列型 (coordinative form、[[辛く A]て[悲しい A]]) であるのに対して、後者は接続助詞を伴わない複合型 (complex form、[[辛く A [悲しい A]]) こと) などのような違いがあるが、便宜上動詞に対応して、ひとまず前者を連用形、後者を中止形と呼ぶことにする。

26 動詞の未然形と已然形が述定用法 (述語) や装定用法 (修飾語) として使われるように、形容詞の未然形と已然形も述定用法 (述語) や装定用法 (修飾語) として使われる。述定用法が用言 (verbal, predicative) として使われるのに対して、装定用法は連体言 (adjectival) として使われるのである。また、連体言が名詞的素性[+N]を含む体言の前に使われるのに対して、連用形が名詞的素性を含まない用言 (すなわち、[-N]) の前で使われるのは、動詞の場合と同じである。

(7) 名詞・代名詞・指示詞

- a. 子供-達；子供-ら (複数形)
- b. 先生-達；先生-方 (複数形)
- c. 私-達；私-ら；私ども (複数形)
- d. これ-達；これ-ら (複数形)

(8) a. *²⁷見-る-た²⁸；*見-た-る

- b. *見-る-て；*見-て-る²⁸；*見-た-て；*見-て-た²⁸

(9) a. *辛-い-かった；*辛-かった-い

- b. *辛-く-い；*辛-い-く；*辛-く-かった；*辛-かった-く

屈折形態論が動詞、形容詞や名詞内部の語形変化を扱うのに対して、派生形態論は動詞、形容詞、形容名詞や名詞など相互の間の品詞の転換を扱う。また、**屈折 (inflection)** は語幹に接尾辞を付け加えて、語形変化を表わすが、**派生 (derivation)** は語幹に接頭辞や接尾辞²⁹を付け加えてより大きな語を造る。

接尾辞が語幹の語尾に付加される拘束形態素であるのに対して、**接頭辞**は語幹の語頭に付加される拘束形態素である。日本語の接頭辞と接尾辞の間には次のような共通点 ((一)と(二)) と相違点 ((三)から(六)まで) がある。

- (一) 接頭辞も接尾辞も拘束形態素である。例えば、形容詞の語尾に付け加えられて、名詞を造り出す**名詞化接尾辞** (noun suffix) 「-さ」や「-み」は拘束形態素であり、それだけで独立して現われることはできない。その他、形容詞の語尾に付け加えられて、動詞を造り出す**動詞化接尾辞**の「(高)-m」、

27 星じるし「*」(asterisk) は当該表現は非文で、すなわち、ネーティブ・スピーカーの間では一般に使われないことを表す。

28 「見てる」「見てた」という表現はあるが、これらの表現は連用形と終止形の並用ではなく、「見ている」、「見ていた」などの進行相を表わす「いる」の「い」が脱落してできた形式である。「いる」などの (補) 助動詞や「から、さえ、も」などの副助詞は屈折辞ではないので、動詞の語形変化の後に続くことが許される。

29 影山 (1999: 164) を参照。

自動詞を造り出す自動詞化接尾辞の「(高 m)-ar」、他動詞を造り出す他動詞化接尾辞の「(高 m)-e」もみな拘束形態素に属する。また、形容詞の語頭に付け加えられる「か-(弱い)」、「こ-(高い)」、「もの-(悲しい)」などの接頭辞も本来の語彙的意味は薄れて接辞化しているという視点から拘束形態素と見てもよかろう。そして、漢語形容名詞の語頭に付け加えられる「有-(意義)、再-(試験)、未-(発表)、反-(作用)、小-(規模)」なども、その生産力が相当に活発なことから、一種の接頭辞である²⁹とってよかろう。

- (二) 接頭辞も接尾辞も語 (word) に付くのが原則であり、語より大きい単位である句 (phrase) や節 (clause) などには付かない。しかし、複合語は幾つかの語や形態素から成っているが、全体としてはやはり 1 つの語であるので、接頭辞や接尾辞を付け加えることができる。

(10) a. [気味-好]い、[気味-悪]い

b. [こ[気味-好]]い、[こ[気味-悪]]い

- (三) 語幹に接尾辞が付加されると、原則的に派生語の品詞が元の語の品詞から新しく生じた派生語の品詞に変化するのに対して、語幹に接頭辞が付加されると、語の意味は変化するが、新しく生じた派生語の品詞は必ずしも元の品詞と変るものではない。これは、日本語の句構造 (phrase structure) と語構造 (word structure) がともに主部後置型 (head-final/last)³⁰ に属するので、語尾 (すなわち、右端) の位置に起こる接尾辞が主部 (head ; center) として品詞の種類を決定するからである。一方、接頭辞は語頭 (すなわち、左端) の位置に起こるので品詞の決定に参与することはほとんどない。次の接尾辞の例 (a)と接頭辞の例 (b)を較べて見よう。

(11) a. [重 A-さ_N]_N、[重 A-み_N]_N、[樂し A-そう_{AN}]_{AN}、[樂し A-げ_{AN}]_{AN}、

30 「主部後置型」は「主部右端型」や「主部末端型」とも呼ばれ、「主部前置型」(head-initial/first、「主部左端型」や「主部先頭型」とも呼ばれる) とともに自然言語の統語構造に関するパラメータ (parameter) の 1 つになっている。

[高 A-まる_{vi}]_{vi}、[高 A-める_{vt}]_{vt}、[眠 v-け_N]_N、[子供 N-つばい_A]_A、
 [秋 N-めく_{vi}]_{vi}、[映画 N-化_{vt}]_{vt}、[科学 N-的_{AN}]_{AN}³¹、[特殊 AN-性_N]_N、
 [化学 N-者_N]_N³²、[読み v-方_N]_N³²

b. [[か-弱_A]_い]_A、[[こ-高_A]_い]_A、[[もの-悲し_A]_い]_A、[[ひつ-くく_v]_る]_v、
 [お-客_N]_N、[ど-真ん中_N]_N、[小-部屋_N]_N、[真-正直_{AN}]_{AN}、[好-成績_N]_N

(11a) の派生接尾辞が語幹に付加された後、語幹は形容詞 (A) から名詞 (N)、形容詞から形容名詞 (AN)、形容詞から自動詞 (Vi)・他動詞 (Vt)、名詞から自動詞・他動詞、名詞から形容名詞などのように派生語の品詞を変えている。一方、(11b) の派生接頭辞は程度・寸法や強調などの意味を表わすのみで、品詞そのものは変えていない。このように語幹に何らかの実質的な意味を添加するものの、語幹の品詞を変えない接頭辞を**意味的接頭辞** (semantic suffix)、あるいは**意味的接辞** (semantic affix) と呼ぶことがある。しかし、派生接頭辞の中でも、例外的に語幹の品詞を変えるものがある。例えば、(12)の例句に含まれる語幹の「意義」と「規模」は名詞に属するが、それにそれぞれ接頭辞の「有-」と「小-」が付加されると「有意義な」「小規模な」のように形容名詞に転化する。

(12) [[有-_{意義} N]_{AN}な]、[[小-_{規模} N]_{AN}な]

(四) 語幹に接尾辞が付加されるとき、その接尾辞の数は必ずしも1つに限らないが、語幹に付加される接頭辞は原則的に1つに限られる³³。

31 下付けの「AN」は、**形容名詞** (adjective noun; **名詞的形容詞** (nominal adjective) と呼ぶこともある) を表わす。

32 この2つの例においては、語幹と接尾辞がともに名詞であるので、合成語そのものの品詞は変わっていないが、「化学者」は化学をするヒトを指し、「読み方」は、読む方法を意味するので、合成語の**主部** (head; center) はそれぞれ「-者」「-方」である。

33 [ど-真ん中] などのように例外的に、1つ以上の接頭辞が付くことがある。「真ん中」の「真ん」を語幹「中」に付加された接頭辞と解し、「土真ん中」の「土」を語幹「真ん中」に付加

- (13) a. [[[[[暖]_A-m]_V]-ar]_{Vi}]-u]_{Vi} (暖まる：自動詞)
 b. [[[[[暖]_A-m]_V]-e]_{Vi}]-ru]_{Vi} (暖める：他動詞)
 c. [[[[[行き]_{Vi}-た(い)]_A]-がる]_{Vi} (行きたがる：渴仰を表わす自動詞)
 d. [[[[[食べ]_{Vi}-た(い)]_A]-がる]_{Vi} (食べたがる：渴仰を表わす他動詞)
 e. [[[[[行か]_{Vi}-せ(る)]_{Vi}]-られ]_{Vi}-る]_{Vi}³⁴ (行かせられる：使役受動の意味を含む自動詞)
 f. [[[[[賞め]_{Vi}-させ(る)]_{Vi}]-られ]_{Vi}-る]_{Vi}³⁴ (賞めさせられる：使役受動の意味を含む自動詞)
- (14) a. [[うら-[淋し]_A]_A-い]_A、[[もの-[淋し]_A]_A-い]_A
 b. *[[うら-[もの-[淋し]_A]_A]_A-い]_A、*[[もの-[うら-[淋し]_A]_A]_A-い]_A
- (五) 接頭辞の中には、**対比強勢** (contrastive stress) を受けられるものがあるが、接尾辞は原則的に受けられない。
- (15) a. [重-さ] [重-み]
 b. [楽し-そう] [楽し-げ]³⁵
- (16) a. [Φ道德] [不道德]
 b. [Φ化学的] [非科学的]
 c. [正比例] [反比例]
- (六) 接尾辞の中には、特に屈折を表わす接尾辞 (例えば、已然形の「-た」(-Ta))

された接頭辞と解せば、「土」と「真ん」の2つの接頭辞が付加されたことになる。また、「好評」や「好物」の「好」を接頭辞(「好」はその他「好漢、好況、好機会」などにも現われる)と見なせば、「大好評、大好物」なども「大」「好」の2つの接頭辞が連続して現われることになる。しかし、漢語語彙の単純語と合成語の判定については、学者の間に異論がある上に、これらの用例はあくまでも例外的なものだと言えよう。

- 34 言語学者の中には、「(さ)せる」「(ら)れる」は接尾辞ではなく、**補文** (complement) を項 (argument) に取る述語だと分析する人達もいるが、ここでは一先ず接尾辞として取り扱うことにする。
- 35 しかし、「『重さ』ではなくて、『重みだ』；『楽しそう』ではない、『楽しげ』だ』のように、2つの異なる接尾辞を対照して強調するために、ことさらに強く発音されることがある。

は、語幹との結合力がことさら強いので、音便変化 (morphophonemic change) を起こすことがある。一方、接頭辞と語幹らの間にこのような音便変化が見られるのは比較的に稀なことである。

(17) 子音動詞の已然形、連用形、並列形に起こる音便変化³⁶

$$(i) \begin{pmatrix} m \\ n \\ b \end{pmatrix} -Ta/Te/Tari \text{ (た/て/たり)} \rightarrow nda/nde/ndari \text{ (んだ/んで/んだり)}$$

(語幹末尾が子音「{m/n/b}」の場合、これらの子音が撥音「n」に転化した後、「d{a/e/ari}」を取る。)

$$(ii) \begin{pmatrix} t \\ r \\ w \end{pmatrix} -Ta/Te/Tari \text{ (た/て/たり)} \rightarrow tta/tte/ttari \text{ (った/って/ったり)}$$

(語幹末尾が子音「{t/r/w}」の場合、これらの子音が促音「tt」に転化した後、「t{a/e/ari}」を取る。)

$$(iii) \begin{pmatrix} k \\ g \\ s \end{pmatrix} -Ta/Te/Tari \text{ (た/て/たり)} \rightarrow \begin{pmatrix} ita/ite/itari \\ ida/ide/idari \\ sita/site/sitari \end{pmatrix} \begin{matrix} \text{(いた/いて/いたり)} \\ \text{(いだ/いで/いだり)} \\ \text{(した/して/したり)} \end{matrix}$$

(語幹末尾が子音「{k/g/s}」の場合、「k」と「g」は母音「i」に置き換えらると同時に、「g」の後ろに起こる「T」は「g」の同化作用 (assimilation) を受け濁音化して、[d] となり、また、[s] はそのまま保留され [i] と結合して、それぞれ {it/id/sit} {a/e/ari} と変化する。)

これは、日本語の音節構造 (syllabic structure) (あるいは、モーラ構造) が子音と子音の連続は子音 (C) と拗音 (y) の結合 (Cy) としか許さないので、

36 子音動詞の已然形 (-Ta/た) と連用形 (-Te/て) に関する音便変化は、すでに脚注 10 の中で簡単に触れたが、ここでは並列形 (-Tari/たり) を加えて、もっと詳しく説明することにする。

子音で終わる語幹に子音で始まる接尾辞「-Ta/Te/Tari」などが付加された場合、「語尾子音 (C)+語頭子音 (C)」という連続子音の結合は許されず、その結果、2 番目の語頭子音が**特殊音素** (撥音、促音) に転化するなどの音便変化によって、子音 (C) と母音 (V) が交互に起こる (すなわち、CVCVCV・・・・・・) 調音的にも、聴覚的にも**最適な音節構造** (optimal syllabic structure) を保持するためである。

- (七) 「もの-」「うら-」「か-」「た-」「こ-」など形容詞や形容名詞語幹に付加されて形容詞や形容名詞を派生する接頭辞³⁷が主として文語・書面語的な語彙に属し、かつ、事態や属性の低調性・緩和性・含蓄性などを示唆する意味・機能を持つ、**緩和接頭辞** (downtoning prefix) に属するのに対して、「ま-、まっ-、まん-」「超-」「ひっ-、ひん-」「ぶっ-、ぶん-」「かつ-」「どっ-」など形容 (名) 詞、名詞や動詞語幹に付加されて形容名詞や動詞を派生する接頭語は、主として口語・俗語的な語彙に属し、事態の顕著性・強調性・誇示性や動作の急激性・徹底性・具体性を強調する意味・機能を持つ、**強意接頭辞** (intensifying prefix) に属する。また、文語・書面語的な接頭語が原則的に異形態を持たず、語幹も音便変化を起こすことが少ないのに対して、口語・俗語的な接頭語は促音・撥音などを伴う異形態を持ち、語幹も連濁・半濁³⁸・母音削除などの音便変化を起こしやすい (例えば、「まっ赤」「まん丸い」「てばやい」など)。

- (八) 一般に、派生語の語幹と接頭辞の間には、連濁変化・半濁変化・促音挿入などの音便変化が起こることがあるが、動詞の屈折変化を除いて、語幹と接尾辞の間には原則的にこれらの変化が起こらない (例えば、「読んだ」

37 例えば、「もの悲しい」「もの静かな」「うら寂しい」「か弱い」「た易い」「こ高い」など。

38 **連濁変化** (voicing assimilation) や**半濁変化** (aspiration assimilation) とは、2つの形態素が派生語や複合語として共起するとき、二番目の形態素の頭子音が、濁音や半濁音に変化する現象を指す。これはの現象の内容については後述に詳しい。

「買った」「開けっぱなし」など)。

(九) また、接頭辞は異形態をもつことができる (例えば、「ま-」「まん-」と「まっ-」、「ひっ-」と「ひん-」など) が、接尾辞が異形態をもつことは許されない。

(十) 接頭辞に関する異形態や音便変化は、(18) から (25) の例語に基づいて、次のように整理することができる。

(18) a. [ま昼(ひる)][ま向(むか)い][ま夏(なつ)]

b. [まっ只中(ただなか)][まっ黒(くろ)][まっ向(こう)]

[まっ裸(ばだか)][まっ平(ぴら)][まっ昼間(びるま)]

[まっ最中(さいちゅう)][まっ先(さき)][まっ青(さお)]

[まっ白(しろ)][まっ直(すぐ)][まっ二(ふた)つ]

[まっ正直(しょうじき)]

c. [まん中(なか)]

(19) a. [ひっ張(ば)る][ひっ叩(ぱた)く][ひっ繰り返(くりかえ)す]

[ひっ掛(か)ける][ひっ掛(か)かる][ひっ括(くく)る]

[ひっ込(こ)む][ひっ込(こ)める]

b. [ひん剥(む)く][ひん曲(ま)げる]

(20) a. [ぶっ放(ばな)す][ぶっ叩(たた)く][ぶっ倒(たお)す][ぶっ殺(ころ)す]

b. [ぶん流(なが)す][ぶん殴(なぐ)る][ぶん投(な)げる]

(21) [かつ切る][かつさらう][かつばらう]

(22) [くっつく][くっつける]

(23) [すっ飛(と)ぶ][すっ飛(と)ばす][すっ裸(ばだか)]

(24) a. [どまん中][ど阿呆]

b. [どっちらける]

(25) [悲(かな)しい][もの悲(がな)しい][比(ひ)例][反(ひ)比(び)例]

(イ) 語幹の頭子音が無声音 (無声閉鎖音 (voiceless stop) の「タ」[t]行と「カ」

[k]行、および無声摩擦音 (voiceless fricative) の「サ」[s]行) であるとき、接頭語と語幹の間に促音「ッ」が添加される (例えば、「まっ黒 (くろ)、まっ白 (しろ)、まっ先 (さき)」など)。

(ロ) 語幹の頭子音が無声声門摩擦音 (voiceless glottal fricative、すなわち、「ハ」[h]行) であるとき、この頭子音は連濁変化 (すなわち、有声化 (voicing)) を起こして、無声の声門摩擦音[h]が有声の両唇閉鎖音 [b] (例えば、「二 (ふた) つ」が「ま二 (ふた) つ」) になるか、あるいは、半濁変化 (すなわち、無声の声門摩擦音[h]が閉鎖音化して両唇閉鎖音[p] (例えば、「昼 (ひる) ま」が「まっ昼 (ひる) ま」、「放 (はな) す」が「ぶっ放 (はな) す」) になり、接頭語と語幹の間に促音「ッ」が添加される。

(ハ) 語幹の頭子音が両唇鼻音 (bilabial nasal) [m]や歯茎鼻音 (alveolar nasal) [n] であるとき、接頭語と語幹の間に撥音「ン」が挿入される (例えば、「ま中(なか)」が「まん中」、「ままるい」が「まんまる (い)」、「ひ曲 (ま) げる」が「ひん曲げる」、「ぶ殴 (なぐ) る」が「ぶん殴る」になる)。

(ニ) 語幹が母音 (vowel) の[a] (「ア」) で始まるとき、接頭辞の尾母音と語幹の頭母音の間に起こる連続母音を避けるために、この母音は削除される³⁹。このとき、削除された母音の後に子音が現れれば、上述 (イ) の原則に基いて接頭語の異形態が決定される (例えば、「ま赤」の「アカ」(aka) は「か」(ka) になり、最終的に「まっか」(makka) になる)。しかし、母音の後にまた母音が続くときは、語頭の母音の削除に代って、無標 (unmarked) の無声歯茎摩擦音[s]が挿入され、上述 (ロ) の原則に基いて接頭語の異形態が決定される (例えば、「ま青」の「アオ」(ao) は「サオ」(sao) になり、最終的に「まっさお」(massao) になる)。

39 あるいは、重音脱落 (haplology) が起こり、同種の母音のうちその1つが脱落すると解してもよからう。

このように、ほとんどすべての接頭語の異形態は、語幹の音声形態に基いて音韻的に決定される (phonological conditioned) のである。

4. 派生語と複合語

派生語が語幹と接辞からなるのに対し、複合語は語幹と語幹から形成なる。日本語の主な派生語には派生名詞、派生動詞、派生形容詞が含まれ、複合語には、複合名詞、複合動詞、複合形容詞が含まれる。

語形成 (word formation) という視点から合成語の内部構造を見ると、複合語は語幹と語幹からなり、複合語全体の品詞を決定する**主部** (head) が原則的に複合語の右端に起こる。そして、派生語は語幹と接辞からなり、接辞は接尾辞として語幹の後ろに現われるか、接頭辞として語幹の前に現われる。接尾辞をとる場合、派生語全体の品詞は接尾辞によって決定され、また、接頭辞をとる場合には語幹の品詞を変えることがないので、日本語は派生語と複合語を問わず、ともに**主部後置型** (head-final) の特徴を具えている⁴⁰ことが分かる。

さらに、複合語と派生語の形態素における**統語構造** (syntactic structure) から見てみると、複合語には**主述型** (subject-predicate compound ; 例えば、「神隠し (v.神が隠す)、虫食い (v.虫が食う)、受取人払い (v.受取人が払う)、面目ない (v.面目がない)、腹黒い (v.腹が黒い)」、**他動詞・目的語型** (verb-object compound ; 例えば、「魚釣り (v.魚を釣る)、金儲け (v.金を儲ける)、結婚祝 (v.結婚を祝う)」、**並列型** (coordinative compound ; 例えば、「ウエ・シタ、ウチ・ソト、上下、往来、微苦笑⁴¹、甘悲しい (v.甘くて悲しい)、ビッター・スウィート」)、**修飾型／装定型** (modifier-head compound ; 例えば、「薄暗い、灰白い、細長い」) など色々なタイプ

40 日本語は句、節や文などにおいても主部末端の特徴を示す。

41 「微苦笑」は「微笑・苦笑」という並列型複合が転化してできた**混成語** (hybrid word) である。

が見られるが、派生語は原則的に修飾型のタイプ1つしか見られないようである。ことに、緩和や強調の意味を表わす接頭辞は、語幹の形容(名)詞や名詞に対して、それぞれ程度副詞や形容詞(例えば、「もの悲しい」「うら寂しい」「こ首」「こ脇」)として機能することが多く、そのためにこれらの接頭辞を含む派生形容(名)詞や名詞がはさらに程度副詞や形容詞によって修飾されることは少ない(例えば、「? とてももの悲しい」「? まことにうら寂しい」「? 小さなこ首」)。

また、複合語は全体的な意味が個々の形態素の意味の総和から得られないことが多い。すなわち、複合語は**熟語化** (idiomaticalize) しやすく、**照合語** (idiomatic compound) を形成することがある。一方、派生語の全体的な意味は、それを構成する個々の形態素の意味の単なる総和から得られることが多い。すなわち、派生語は一般に複合語に比べて熟語化の速度や進度が遅く、全体的な意味は個々の形態素の意味の総和から得られるという**合成の原則** (principle of composition) を固守していると言えよう。日本語一般の派生語と複合語の区別や下位分類については、3.2 節で概要を述べたので、以下日本語の派生形容詞と複合形容詞についてももう少し詳しく述べることにする。

4.1 派生形容詞

まず、形容詞を派生形容詞と複合形容詞に分け、派生形容詞をさらに(イ)接辞の語種(和語・漢語・外来語)(ロ)意味(美化・緩和・強調)(ハ)統語構造(修飾型)などの視点から下位分類してみる。

(A) 接頭辞をとる派生形容詞

一般の辞書では、接頭辞と見なされるものは都合 15 個あるが、実際に語彙調査

を行った結果、和語接頭語を次の 32 個挙げることができる⁴²。

1 あ、2 あお、3 いけ、4 うす、5 うすら、6 うそ、7 うら、8 お、9 か、10 け、11 こ、
12 こつ、13 す、14 すえ、15 そら、16 た、17 ただ、18 ただつ、19 て、20 ど、21 なま、22 の、
23 ばか、24 ひ、25 ひよろ、26 ほの、27 ほろ、28 ま、29 まつ、30 まん、31 もの、32 むず

さらに、漢語の「しち-」と「超-」および外来語の「スーパー」と合わせて全部 35 個ある。

(イ) 接辞の語種

① 和語：

[あくどい] [いけあたじけない] [うそくらい] [うらがなしい] [おぐらい]
[おさむい] [かぐろい] [けうとい] [こうるさい] [こっぱずかし
い]

② 漢語：

[しちくどい] [しちむずかしい] [超いそがしい] [超かわいい] [超たのしい]
[超ヤバイ]

③ 外来語：[スーパーむずかしい]

(ロ) 統語構造：

複合語に見られる数多くの統語構造に対して、派生語には原則的に修飾型
(例えば、「ものがなしい (v.なんとなく悲しい)」) のタイプ 1 つしか見ら
れないようである。

(ハ) 意味類型

① 美化型：

[おいそがしい] [おうつくしい] [おやすい]⁴³

42 「あ」「か」「た」「ほの」などのように一般辞書でははっきりと「接頭辞」と書かれていないものは、実際には生産性が低い上、生成された派生語全体の語義が不明な場合も多く、いわゆる「無意味形態素」として分析される可能性もあろう。

②緩和型：

[うそくらい][うらがなしい][おぐらい][おさむい][かぐろ
い]

③強調型：

[てあつい][どあつかましい][いけあたじけない][しちくどい]
[超いそがしい][超かわいい][スーパーむずかしい][ばかたか
い]

④その他：

[あくどい][のぶとい]⁴⁴

(B) 接尾辞をとる派生形容詞

一般辞書によって⁴⁵、接尾辞と見なされるものは16個ある。収集された語
例には「～たい」⁴⁶「～ったい」形の派生語も見られるので、あわせて次の
ような18個になった。

①「～いい・よい」②「～(難)がたい」「～(堅)がたい」⁴⁷③「～からい・がらい」

④「～くさい」⁴⁸⑤「～たい」⑥「～っこい」⑦「～ったい」⑧「～っちい」⁴⁹

43 もともと女性専用の純粋な形容詞美化表現である「おいそがしい」「おうつくしい」などに対し、「おやすい」は皮肉の意味をこめて使われる場合もある。

44 「あくどい」「のぶとい」など語源が不明なので、意味類型の判断もしにくく、一応「その他」とした。

45 接尾辞の多くには自由語でもあるので、派生形容詞と分析すべきか、複合形容詞と分析すべきか問題点が多いが、ひとまず辞書に基づいて派生形容詞と見なした。

46 伝統的な国語文法では、「たい」をイ形容詞型の助動詞とみなしているのに対し、本論ではこれを「形容詞化接尾辞」として取り扱うが、これを形容詞型の複合述語と見なす学者もいることに注意されたい。

47 「～堅い」と「～難い」は同音異形であり、意味が完全に異なるので、2つの独立した形態素と見なされる。

48 「くさい」は自由形態素としても使われるので、「～くさい」形の形容詞は「複合形容詞」なのか、あるいは「派生形容詞」なのか判断しにくい語例が多い。原則として、合成語全体において(「阿呆くさい」「面倒くさい」に起こる「くさい」のように)意味の中心部をなさないも

- ⑨「～づよい」⑩「～つらい」⁵⁰⑪「～っぱい」⑫「～っぽい」⑬「～やすい」
 ⑭「～よわい」⑮「～ない」⑯「～にくい(難い)」⑰「～にくい(憎い)」⑱「～わるい」

そして、接頭辞が付いた形容詞と同じく下位分類を試みる。

(イ) 接辞の語種

実際に、収集された語例を見ると、派生形容詞の接尾辞には和語以外の語種が全然見当たらない。しかし、接尾辞をとる派生形容詞語幹の中には和語もあるし、漢語もある⁵¹。以下、接辞の語種による例を挙げる。

①和語語幹＋和語接尾辞：

[きよい]⁵²[せちがらい][けむたい][ねむたい][あぶらっこい][ねばりっこい][はばったい][あつぼったい]

②漢語語幹＋和語接尾辞：

[あほうくさい][めんどうくさい][辛抱づよい][気づよい][きざっぽい][きやすい]・・・・・・・・

③外来語：なし

(ロ) 意味類型

のを接尾辞と認めることにする。

- 49 「まるまっちい」は「まるまるしい」の転音現象からの異形態なので、ここで挙げられる「～ちい」形派生形容詞は区別しておく。
- 50 収集した例はすべて「V＋つらい」形のもので、「～つらい」は接尾辞か複合語の後部要素なのか深く探求・論証する必要がある。
- 51 「～くさい」形派生形容詞の内部構造には「N＋くさい」(田舎くさい)、「V＋くさい」(焦げくさい)、「AN＋くさい」(面倒くさい)などの異なる類型が見られるが、いわゆる「V」はその実動詞の名詞化形「V-(i)」であり、「AN」は名詞的素性を含んでいるので、「～くさい」は名詞語幹をとると一般化することができる。
- 52 現代語で単純語と見なされる「きよい」と「いさぎよい」2例しか見つからなかった。しかも、「～いい」の古語読みである「～よい」によるものだけである。このことから、「～よい」は現代日本語ではすでに「接尾辞」の機能を失っていると推論することができよう。

接頭辞をとる派生形容詞と同じく、「緩和型」と「強調型」が見られるが、「美化型」は見当たらない。

①緩和型：[ぐちっばい][しろっばい]・・・・・・・・

②強調型：[あほうくさい][めんどうくさい]・・・・・・・・

(ハ) 統語構造：修飾型：[おもったい]・・・・・・・・

実際には、接辞か語幹なのかと判断しにくい接尾辞が多い。日本語の語構造は、「主部後置型」という特徴を具えているので、派生語と複合語を問わず、品詞を決定するのは後部要素であり、この特徴によって派生語と複合語を識別することはできない。ことに、「あおくさい」「いなくさい」のような合形容詞の後部要素の「くさい」は、自由形態素と解することができ、その意味内容もさほどに文法化していないので、一体語幹からなる複合語なのか接尾辞をとるか判断することが難しい。原則として、意味の中心部をなさない場合を接尾辞と認めることにするが、そこにある程度の恣意性と判断性の揺れがあることを認めざるを得ない。

4.2 複合形容詞

複合形容詞は一般に生産力 (productivity) が強く、複合名詞は理論的には無限に拡張される可能性を持つが、複合形容詞は原則的にそのような拡張性を持たない。

(イ) 語種 (語幹の組み合わせ；順序を問わず)

①和語＋和語：[うす・あおい][うす・あまい]・・・・・・・・

②漢語＋和語：[我慢・づよい]・・・・・・・・

③漢語＋漢語：[四・角い][美・々しい]・・・・・・・・

④外来語＋和語：[ゴム・くさい]

⑤漢語＋外来語：なし

⑥外来語＋外来語：なし

(ロ) 統語構造

複合語には主述型、並立型、修飾型が見られる。

① 主述型⁵³

[面目(が)ない][腹(が)黒い]

② 並列型⁵⁴

[暑(くて)苦しい][甘(くて)悲しい][甘(くて)酸っぱい]

③ 修飾型⁵⁵

[薄(く)暗い][細(く)長い]

そして、複合形容詞には2つの語幹があるが、その意味の中心部はどの語幹のにあるの一概に判定し難いが、この序説では評論しない。

5. 結び

本論では、まず日本語の語と語形成に関する基本的な概念や用語について述べ、次に、用例を形容詞にしぼって、もっぱら日本語の形容詞とその派生語や複合語の語形成について考察した。現段階の結論では、単純語である形容詞が1つの語幹からなるのに対し、合成語である派生形容詞と複合形容詞の内容は次のように記述することができる。

(1) 派生形容詞：1つの語幹と1つの接辞からなるもの

(A) 接頭辞をとる派生形容詞

53 つまり、「面目ない」(v.面目がない)、「腹黒い」(v.腹が黒い)など複合形容詞の内部構造には格関係が見られるのである。

54 つまり、「A1 < A2」というような内部構造が見られる複合型形容詞である。もっとも比率が高い類型とも言える。

55 「薄暗い」「細長い」のような複合形容詞を「薄くて暗い」「細くて長い」というように解釈することが一般的であるが、「灰白い」のような構成要素の語源が不明あるいは推察し難い複合形容詞については、その内部構造をまだ議論の余地がある。

(イ) 接辞の語種: ①和語 ([あくどい]) ②漢語 ([しちくどい]) ③外来語 ([スーパーむずかしい])

(ロ) 意味類型: ①美化型 ([おいそがしい) ②緩和型 ([うそくらい) ③強調型([てあつい])

(ハ) 統語構造: 修飾型 ([ものがなしい])

(B) 接尾辞をとる派生形容詞

(イ) 接辞の語種: ①和語語幹+和語接尾辞 ([おもったい][しょっぱい])②漢語語幹+和語接尾辞 ([阿呆くさい][面倒くさい])

(ロ) 意味類型: ①緩和型 ([ぐちっぱい]) ②強調型 ([めんどうくさい])

(ハ) 統語構造: 修飾型 ([おもったい])

(2) 複合形容詞

(イ) 接辞の語種: ①和語+和語 ([うす・あまい]) ②和語+漢語 ([我慢・づよい]) ③漢語+漢語 ([四・角い]) ④外来語+和語 ([ゴム・くさい])

(ロ) 統語構造: ①主述型 ([はら(が)ぐろい]) ②並列型 ([あつ(くて)くるしい]) ③修飾型 ([うす(く)ぐらい])

特に注意されたいのは、複合語と派生語の区別は必ずしも判然としないようである。それは、語幹と接辞の区別は直裁分明なものではなく、両者の間は連続相をなしているわけであろう。つまり、下記の基準 (一) の通り、原則的に語幹が自由語であるのに対し、接辞は拘束語であるが、実際には、接辞が自由語であるか、拘束語であるか、見分けが付きにくいことがある。その場合はどうすればよいのであろうか。以下にまとめて語幹と接辞を区別する主な基準を四つ挙げる。

(一) 原則的に語幹が自由語であるのに対し、接辞は拘束語である

(二) 接辞が自由語にも、拘束語にも解されるとき、接辞の意味が**語彙的** (literal) なものから**文法的** (grammatical) なものへと**文法化** (grammaticalize) しているかの度合いを考慮に入れ、文法化の度合いが高ければ接辞と見なす。
例えば、「あせくさい」「香水くさい」「ほこりくさい」などにおける

「-くさい」がほとんど自由語「くさい」の語義的内容のままで使われているのに対し、「バタくさい」「田舎くさい」「爺くさい」などにおける「-くさい」は前項名詞が表す属性や雰囲気をもつという意味で蔑称的な接尾辞として使われると解されることができよう。しかし、文法化の度合いというのはもともと主観的な概念であり、客観的な判断基準をもたないので、連続的に理解され、個人的なユレがあることに注意しなければならない。

- (三) 接辞を接頭辞と接尾辞に分けて考慮するとき、接頭辞がその語尾において音便変化 (例えば、「ま-」と「ひ-」における促音化「まっ-」「ひっ-」と撥音化「まん-」「ひん-」) を起し、異形態をもつことができるのに対し、接尾辞は動詞の屈折変化 (すなわち、連用形と已然形) を除いて音便変化が起こらないのが原則である。一方、語幹は複合語の後項語幹や接頭辞をとる派生語の語幹の頭子音が連濁変化や半濁変化を起すことがある。接頭辞はその語尾において、(後項) 語幹はその語頭において音便変化を起こすことによって異形態をもつ可能性があるのに対し、接尾辞は (動詞の屈折変化を除いて) 音便変化を起さず、異形態をもたないという音韻的な事実が接頭辞・語幹・接尾辞を識別する手掛りになることがあるかもしれない。
- (四) 接辞である限り、ある程度の生産力 (productivity) をもつことが前提となる。例えば、名詞化接尾辞の「-さ」がほとんどすべての形容詞を語幹にとることができるのに対し、名詞化接尾辞「-み」は限られた形容詞しか語幹にとれない。「-さ」も「-み」も拘束語に属し、両者とも名詞という文法的な意味だけを表し、語彙的な意味に欠けるので、ともに接尾辞と解されるが、接尾辞「-み」が各々の形容詞に付随する名詞の形で独立した語彙項目 (lexical item) としてレキシコンの中に登録されるのに対し、「-さ」は独立した名詞としては登録されず、“形容詞語幹+さ=名詞”という語彙の余剰規則 (lexical redundancy rule) で生産的に処理することができる。

以上、接辞と語幹を区別する基準を四つ挙げたが、これらの基準が相互に矛盾したり、衝突したりすることがある。例えば、動詞語幹に後接して形容詞を派生する「-にくい」「-やすい」「-がたい」の中、「-にくい」と「-やすい」は自由語に属して語幹と解され (基準(一))、「-がたい」は拘束語 (元来は「かたい」の連濁変化異形態「がたい」であるかもしれない) であるが、「かたい」との連濁変化の結果と分析されれば語幹と解され (基準(三))、三つの接辞ともにほとんどの動作動詞を語幹にとることができるので、生産力が相当豊かである点では接辞と解される (基準 (四))。そして、語義的内容はそれぞれ情意形容詞「憎い」、評価形容詞「安い」属性形容詞「固い」(あるいは、評価形容詞「難しい」) から、意味的に拡張されたものと見なされて接辞 (ないし、**準接辞** (semi-affix)) と解される (基準(二))。これらの事実に鑑みて、(一) から (四) までの基準を重要性のランキングに応じて序列化し、量的 (四つの基準のうちいくつの基準を満足するか)・質的 (上位の基準を満足しているのか、それとも下位の基準を満足しているのか) に当該の形態素の接辞としての度合いを評価するアプローチをとることも考えられる。

参考文献

- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』、東京：ひつじ書房。
- . (1999)『形態論と意味』、東京：くろしお出版。
- 湯廷池 (2000)「日本語文法の再検討：「形容動詞」か「形容名詞」か」、『新世紀の日本語教學研究國際會議論文集』、台北：東吳大學。
- . (2004a.)「名詞化接辞「-さ」と「-み」について」(執筆中)
- . (2004b.)「形容名詞化接尾辞「-そう」について」(執筆中)
- . (2004c.)「日本語の属性形容詞と感情形容詞について」(執筆中)
- . (2004d.)「日本語形容詞の下位分類と活用変化について」(執筆中)

- . (2004e.) 「日本語の動詞と形容詞について」(執筆中)
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』新英文法選書第2巻、東京：大修館書店。
- 新村出 (編) (1993) 『広辞苑第三版』。
- CD-ROM 版 (1996) 『広辞苑第四版』、東京：岩波書店。
- 増田貢 (1978) 『英語形態論』、東京：篠崎書林。
- Adams, V. (1973) An Introduction to Modern English Word-Formation, London: Longman.
- Bloomfield, L. (1926) 'A set of postulates for the science of language' in Joos, M. (ed) (1957) Reading in Linguistics I, Chicago: University of Chicago Press.
- . (1933) Language, London: George Allen & Unwin Word-Formation.
- Jespersen, O. (1924) The Philosophy of Grammar, London: George Allen & Unwin.
- Marchand, H. (1969) The Categories and Types of Present-Day English, München: C.H. Beck.
- Selkirk, E. O. (1982) The Syntax of Words, Linguistic Inquiry Monograph #7, Cambridge, Mass: MIT Press.